

大正七年六月

# 校友會雜誌

號七拾貳第貳卷第

滋賀縣立彦根中學校校友會

# 校友會雜誌

## 第貳卷

## 第貳拾七號目次

○英文欄

○大なる幸福は勞働なり特別會員

村田林次郎

○校友より

○比島マニラより

北川儀平

○明治神宮外苑より

東京高橋貞太郎

○論說

○講演

○太刀山

校友會長 春日重泰

○清盛とクロムウエル

四甲 松井彌七

○余が雜感

四甲 久田郁三

○吳越の興亡に就ての所感

四乙 木下八郎右衛門

○文苑及韻藻

三甲 大谷仲次郎

○孤島の夢

二甲 岩根恒吉

○上遠漕記

五乙 田中與惣彌

○島の夢

四丙 長見貫石

○舟花果詩

三丙 大久保明文

○野大呑無漢湖夜

特別會員 五乙 田中與惣彌

○雜咏、二十首

四丙 長見貫石

○薔薇を拜觀して

四甲 川島丈内

○梅原四十二

四甲 久田郁三

○中村彌平

四甲 木下八郎右衛門

○武村健吉

三丙 武村健吉

○大久保明文

三丙 大久保明文

○武術部報 ○水上部報  
○雜報

○校友會規則

○教職員動靜 ○兎狩之記 ○寄贈

○日誌摘要 ○行啓記念文庫の事ごも ○校

友會收支報告 ○編輯余滴等

○卒業生人名簿訂正篇

○附錄

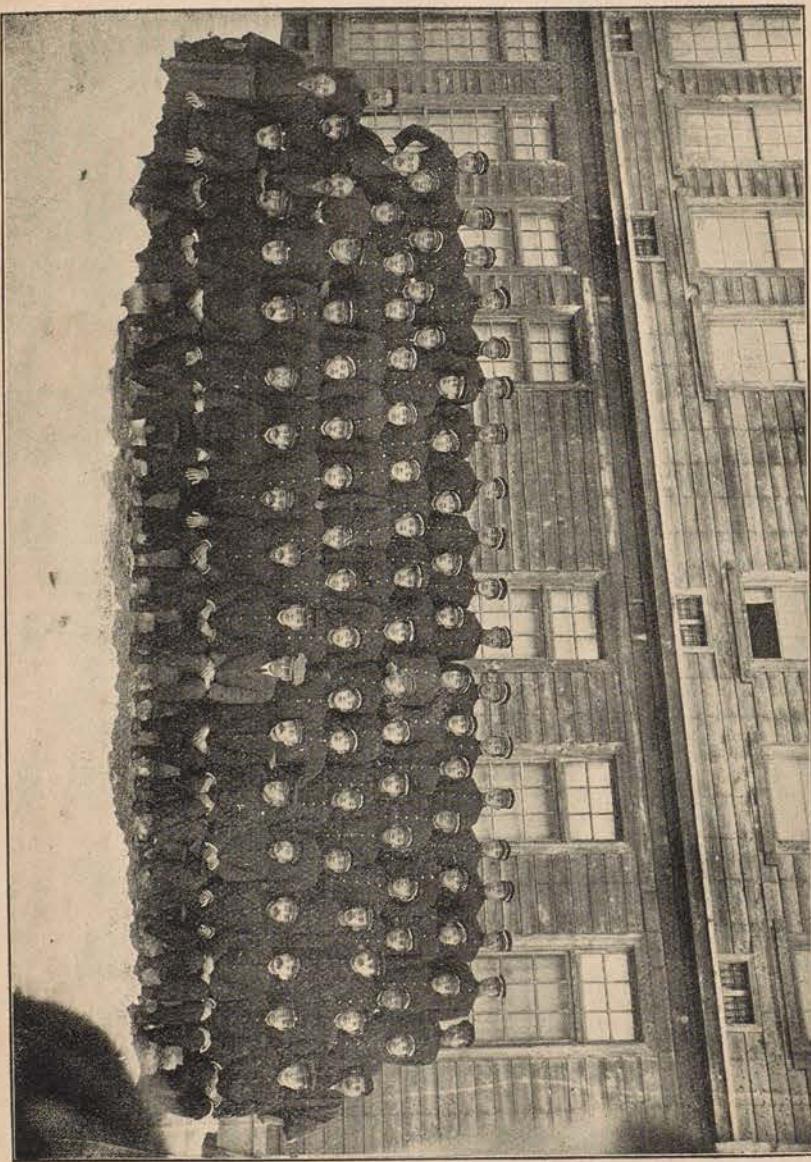
○投稿規則



今歲丁巳十一月奉行陸軍清列大演習  
於湖東之野。車駕親臨帥師六師以行  
禮之地當其衝固以我校馬。大本營自  
十三日至十八日駐驖六日宵旰之際  
聖慈俯有所憇。聖上嘉尚曉回。駕  
特賜銀駕。天至以賞之蓋為異數之寬  
榮。臣等奉之甚于斯於奉戴。天恩深  
深無已。謹書其由以傳諸後昆。

正六年十一月十八日  
彦根中學校長春日重泰謹啟

生業卒度年六正大



# 校友會雜誌 第二卷 第二十七號



## 講演

陸軍紀念日軍事講演

第十九聯隊 宮崎少佐殿

——大正七年三月十日正午より——

エー、本日は日曜日であり、それに少し時間の間違から、と申しますのは實は午前十時にお話する積りで當地に参つたのでしたが、小學校が十時で御校が一時からといふ様な通知が参つて居る相でどうも少なからぬ御迷惑をかけて誠に相すまぬ次第であります。

併し乍ら今や歐洲の地は全く戦亂の巷となつて交戦諸國民は非常な難儀をしてゐる。それを思へば僅か一回の晝食ぐらひ少しばかり後れたとて何の事もなからうと存じます。

講演

一

え、<sup>ハタチ</sup>で今年は日露戦争が了つて丁度十二年、陸軍紀念日を迎へるのは十三回になります。實に數年前の本日は奉天附近に於て吾軍が大捷を得、非常に有利な地位にあつた時で、この日出度い紀念日にかく諸君と一堂に會し講演をいたすことが出来るといふのは誠に以て私の光榮とするところであります。唯今から現歐洲戦争と日露戦争とを比較し、如何に交戦諸國が辛苦艱難し、如何に奮闘努力して居るかといふことを經とし緯としてお話して見たいと思ひます。

先づ歐洲戦争の原因についてお話しませう。

今回の大戦亂は實に遠く前世紀に起因して居るのでありますて其最大因をなしてゐるのは即ち一千八百七十年普佛の戰である。此時佛は獨のためにアルサス、ローレンの二洲を割かれた。之が佛國民にとっては遺恨骨髓に徹したものでありますて今度の戦も之が深因をなして居のであります。爾來獨逸は歐洲の霸者となり、大いに世界的の雄圖をめぐらしました。これがやがて英露と利害相反するに至つたのであります。

獨逸のビスマルクは普佛戦争に勝つて後自國の發展を圖り、安全を保たん爲に奥太利、伊太利と同盟した。之が一千八百八十二年の事。このビスマルクの政策と、獨逸皇帝の積極的な計劃とは大いに歐洲列強に危惧の念を懷かしめ、一千八百九十六年、佛蘭西は露西亞と同盟して之に對抗する様になりました。

其後一千九百〇四年英吉利と佛蘭西とは計つて、モロツコ、エデスの二國と協商を結んだ。ところが翌年獨逸皇帝は、のこのことジブ・ラルタルの海岸のダンシールに出かけ、モロツコの君主と會見いたしまして其獨立を承認した。さあ佛蘭西は承知しない。直ちにアルゲヂナスに於て會議を開いた。此時獨逸に味方したのは僅にオーストリア一ヶ國、其他の國々は皆之に大反対をした故に流石の獨逸も之を棄てなければならぬ様な破目に立ちいたつた。これが有名なモロツコ事件。

翌一千九百〇七年、佛蘭西と英吉利とは協商致しました。もとより此兩國は仲が餘りよくなかつた上植民地の問題に於て利害全く相反して從來にらみ合つて居たものである。ところが右の様に獨逸が次第に霸を唱へる様になつたので此兩國も逐次接近し、遂に此協商となつたのである。かくて、獨逸伊三國同盟といふものに對して英佛露三國協商といふものが出來上る様になり、こゝに此二大同盟が相對峙し、相拮抗して、所謂歐洲の平和を維持したのであります。

更に翌年一千九百〇八年、奥太利はボスニア、ヘルツエゴビナ即デブ・ラルタルに續く二洲を併合致しました。セルビヤは之にたいして大いに反対の聲を上げたが如何せん、頼みの綱の露西亞はといふと例の日露戰争に受けた創痍淺からず、非常に疲弊して居た際でありますから之を助ける事が出來ず、奥太利は目的を達した。即三國同盟が成功した譯です。

一千九百一〇年、獨逸は亞弗利加の東海岸に一砲艦を送つて再びモロツコ問題を引起した、が又もや

英佛の反対に逢つて矛を收ねばならぬ様になつた。これより獨逸はひそかに寝刃をといで時機の至るを待つて居た。一千九百十二年より十三年に亘りましてのかのバルカン半島の戦争、此戦争の結果獨逸はアジャトルコの方まで手を伸し、スラブ族を壓倒せんとして陸軍の大擴張を行つた。佛蘭西は之を知つた。どうしてだまつて居りませう、直に陸軍大擴張をオッ始めた。露西亞も之に應じて擴張をやる。塊太利は擴張こそはやらなかつたが大いに軍の充實を圖る。ベルギーは又これまでの制度を改めて國民皆兵を採用する。列國は何時如何なる時にも戦に應ずる準備をとゝのへた。歐洲の風雲は實に一日と危急を告げたのでありました。

此時、塊太利のフランシス、フェルデナンド大公及その妃のホーヘンベルヒ、この夫婦がボスニアのサラエボーといふ所でセルビヤの一青年に殺された。つまり塊太利の皇族が暗殺せられた譯であります。そこで塊太利が之をしらべて見ると、セルビヤの軍人がこれに交つて居るといふ事が分りました。そこで早速嚴重なる抗議を申込んだが應じない。そこで最後の通牒を發した。然し乍らセルビヤにして見れば實にこんな條件に従ふのは獨立國の体面に拘はる。仲々承知を致しまん。そこで愈々塊太利公使はセルビヤを引揚げて了ひ。こゝに宣戰の布告といふ事になつた。ところが此紛糾におきまして獨逸がどう云つたか。即ち塊太利の要求は至當であり、又此二國間の紛糾は總て二國が折衝し、對局して決すべきもので、決して他の國は喙を容れることはなんんぞこう云ひました。然し乍ら露西亞は之に大反対を唱へた。こゝに於て露西亞、セルビヤ、佛蘭西の三國は戦鬪準備を始め、獨塊は之に對して直ちに動員を令して着々と準備を始めました。

英國がどうして此の戦争に參加する様になつたかと云ひますと、始め獨逸は如何いふ計劃を立てゝ居たかと申しますと、即露西亞、あの大きな露西亞は國が矢鱈に大きいばかりか、交通が餘り發達しない。だから動員がきつと後れる。兵力の集中も極めて遅い。こういふ理由の下に獨逸は極めて微弱なる軍隊、僅か五軍團の兵を露獨國境に送り、さて主力、精銳なる三十五軍團といふ兵を向けて西方佛蘭西を打ち、更に東に戻つて露を破らう、どころ目論んだのであります。

先づ佛蘭西に向ふには佛獨國境には堅固なる砲壘がある。之を陥れるには相當の日數もかかる。ところが例の白耳義は防備が極めて薄い。仍て之を通つて一舉巴里に駕進したら容易に之を陥れる事が出來よう。こう獨逸は考へた。そこで獨逸は永世中立國たる白耳義に對して横着なことを申出た。すなはち俺を通せといふ通牒を發したのであります。白耳義は早速英國に之を告げた。すると英國はこれを助けて、決してそんな亂暴に應じるな、決して無條件で屈服してはいかんぞこう申したのである。こんな譯で英國が參加する様になりました。

獨逸は無理にも白耳義を通らうとします。白耳義はどうしても言ふ事を聞かぬ。此時獨逸では決心した。たゞへ白が許さうが許すまいが、又英吉利の奴が尻押しやうがするまいが、かまふ事はない、ど

しう通つてやれとこう決心したものでありますから、ドンぐる兵をその方面に繰出しました。白耳義もまた之に對して國を擧げて大いに之を喰止めた。此間に佛蘭西は充分準備をして獨逸に當る様になつたのであります。歐洲戰爭は先づ右の様にして起つたのであります。

現在それで戰場の有様がどんなになつて居るかをかいつまん申上げませう。  
前申しました通り獨逸は其主力を擧げて佛國に向ひ、逐次進撃を致しまして、實に巴里を右翼として  
ヴエルダンの附近まで押して來たのであります。

その前に日本的事を一寸申上げておきます。日本は日清戰役の結果としまして遼東半島を領有するこ  
とになつた。ところがどるには取りましたが、例の獨佛露の三國が干渉した。曰く東洋永遠の平和を害  
すと。當時日本の國力では如何とも致方がムいません。露西亞は劍を抜いて吾を強迫するものですから  
遂に憾をのんで之を還附することになりました。露西亞は支那の安全を保つといふので、西班牙を横  
斷し浦鹽にまでのびる西班牙鐵道を設けやうとして支那に要求しました。支那は之に特權を與へます。  
すると又獨逸は代償として山東省を占領する様になりましたが、例の露西亞元來支那の安全を保つとい  
ふ事を看板にして居ながら之に承諾を與へ、而して己れは遼東半島に手をかけたのであります。その中  
此度の戰亂が始り英國が干戈をとるに至つて日本は同盟の情誼を重んじて對獨宣戰を布告し、かくて其  
一部に動員を行ひ、九洲の十八師團が山東の一角に押渡つて青島を陥れ、城將以下將卒を捕虜に致しま  
したのであります。

西部戰線のお話を致しますれば獨軍は白耳義に於て意外の抵抗をかぶりましたが更に屈せず、ドシ  
くと前進致しましてもう巴里は目撃の間にあるといふエール河畔までやつて來まして、衷心與國の戰  
捷を祈る吾國民をして戰況如何になり行くかと手に汗を握らしめました。然し乍ら佛蘭西はアルサス、  
ローレンの方面に大いに兵力を増加し、よく計りよく戰ひ、次第に戰果を得まして、今に於ては殆ど北  
佛の國境まで獨兵を追ひ返しました。

伊太利、伊太利は元來三國同盟の一員です。實を申せば、とつくから獨塊を助けねばならない筈だが  
利害の關係から獨逸に加入せずに中立して雲行を見て居た。獨逸は國防のために戰つて居ない等云ふ  
て中立を守つて居りました。然し其後露塊國境戰の發展、露軍の景氣が好いのを見て洞ヶ峠を下つて協  
商國に加入した。其結果獨塊の軍はセルビヤ、モンテネグロを呑み、ルーマニヤを席捲し、今は伊太利  
の地圖で申しますと此邊まで進出して居ります。(地圖を示す)

バルカンといふのは元來餘り強い國ではない。いづれも雲行を見てといふ連中。セルビヤはやられて  
了ひました。ルーマニヤはといふと暫く雲行を見て居たが、どうも露西亞の雲行が好いので協商國側に  
加入しましたが然も今は全土敵軍のために蹂躪せられて居るといふ仕末。土耳其はかねて獨塊に味方し  
て居りまして今では之等同盟軍がセルビヤの南端まで進んで來て居ります。これに對してモンテネグロ、

セルビヤ、ルーマニアは勿論、遠く英佛に伊太利の兵が遙にこれらの港に上陸して對抗して居ります。次に東部戰線の事を申上げます。

かの獨逸は戰の初期に於きまして、露獨の國境に極微弱の兵を差し向けたものでありますから、勢ひ獨軍はどうしても防勢に出でざるを得ません。露西亞は例ののろい乍らも遂に動員を終り其大兵を以て、全戰線に當つて大攻勢に出ましたが、反對に國境まで押下げられ、昨年の暮におきましては、リガの線まで獨軍は進出致しました。露西亞には軽てかの大革命が起りまして國の中心は失はれ、國內今以て大混亂の中に没して居るのであります。新聞紙によりますと、獨軍は今や無人の境を行くが如し、と書いてあります。昨日の新聞を見ますと、もう露都までは百二三十里の地點に達して居るさうであります。が其後如何なつたかは不明であります。が察するところ露都は獨兵の蹂躪するところとなつたではなからうかと考へます。

先づ現在歐洲の戰況は右の通り。

これをかの日露戰爭に並べますれば誠に天地雲泥の相違を見るのであります。日露戰爭は實に日本にとりましては振古未曾有の役でありましたが、これを露西亞の方にしますれば單に植民地戰位にしか考へぬのであります。が兎にかく極めて小規模です。今の歐洲戰爭は實に歐洲二十幾國といふよりも殆ど全世界の國家といふ國家が國を擧げて從事して居るのだから大規模な筈です。將來日本が戰ふにして

も必ずや日露戰爭以上の大規模なものになるであります、又その覺悟を以て居らねばなりません。

エー、之から日露戰爭と歐洲戰爭とを比較し、各交戰國民が如何に努力して居るかをお話しようと思ひます。

先づ兵員の總數、こゝに圖を以て示しますから圖の大小を以て其數を表すものとお考へ下さい。(圖にて示す)

日露戰爭に於きまして、日本はどれだけの兵を出したかと申しますと、

二十二箇師團

百十萬人

戰場に立つたのが其中

約七十萬人

これは日本の男子の約二分九厘に當ります。極めて僅かなものです。然るに聯合軍はと申しますれば約一千萬人、一千萬と七十萬大變な相違です。獨塊側は約七百萬。

若し召集せられた人員に至れば更に大なるものがありませう。聯合軍の四千萬、男子の三割六分は召集せられたといふ譯です。日露戰の二分九厘と並ぶれば實に何十倍の相違でせう。國別で申しますると

英 百箇師團 兵員 六百六十萬

これが平時の成規は六箇師團です。それが今度は主義を代へ百箇師團になつて居る。

露 二百四十師團 千六百七十萬人

これが一番多い。米國は自由平等の國で平時は極少い。それが目下 五十箇師團 擴張の途にあるのであります。其他

伊 八十師團 四百十萬人

佛 百五十師團 七百十萬人

獨 二百四十師團(平時五十師團) 千二百三十萬人

塊 八十八師團 九百三十萬人

各國の兵備を圖で表すと先づこんなもの、日本はこんなに小さい。後の方から見えぬかも知れん。

日露戰爭の際、諸君は御存知ないかも知れぬが、奉天戰がすむといふと補充がない。餘程の年寄りの後々備まで出したがそれで百十萬。一番大きい露西亞が潰れて後は一体どうなる事だらう。これが引込むといふと、獨逸、塊太利が大きくなる譯です。獨逸は東洋に向つて更にぞれ程手をのばす事だらうか吾々は大いに備ふるところがなくては後悔する事がきつと起るであります。

次に兵器、これは日露戰爭とはまるで時代が違ひます。當時も用ひた機關銃、迫擊砲、手榴彈等は規模が非常に大きくなり、其數量も又大いに増加して居ります、日露戰の時分、日本は二十八珊、口徑九寸二分強といふのを用ひて大いに列強を驚かましたが、今はそれ例の四十二珊、一尺三寸ばかりのを盛に用ひて居り、目下五十二珊などといふのを作りつゝあるそうです。之れに依て見るも當時と今とは誠に隔世の感があるのであります。

射程、即弾丸の距離も當時二里といふのが、四十二珊では九里半、約十里飛びます。一寸東京灣から木更津まで飛ぶ勘定です。

砲弾の種類にも新しいのが出来て居る。從來の物に衝つて碎ける榴弾、敵の頭上に破裂する榴散弾の外、息を塞らす毒瓦斯弾、目を刺擊する催涙弾なみだをもよほすだん。(笑聲) 又火傷を起す焼夷弾といふのも出来て居る。それから夜間に於て闇を照す照明弾もあります。

次は武器彈薬の消費。普佛戰爭に於きまして獨逸は 砲弾八十萬發

日露全役中日本の使つたのは 約百萬發

然るに歐洲戰に於て、シャンバー、ニユ及アルトアの戰のみで約七百五十萬發。ソンム戰に於て英佛の使つたのは三千四百萬發。ソンム戰といふのは八十八日間續きましたから、一日に四十萬發の割になります。奉天で日本は三十萬發使つた。丁度ソンム戰二日半で日露戰爭の弾丸を使つた譯です人智の進むに随つて弾丸の數は益々多くなる。砲弾でさへ此の通り。小銃弾に至つては一体どれ位になりませう。殆ど數へ切れぬ程です。(圖にて示す)

飛行器は今度の戰爭で始めて使はれる様になりました。無論飛行機は爆弾の投下とか、砲弾の觀測とか、聯絡通信の役をするものであります。其數の如きも非常なものであります。

佛	二千二百機
英	千三百機
伊	三百五十機
露	三百機
獨	二千五百機
塊	二百五十機（圖にて示す）

全部で約七千、これに日本の飛行機を加へるとそれ位になりませう。（笑聲）白佛方面では昨年の五月一ヶ月で七百二十落ちて居ます。一日に二十四づゝになる。

次に自働車　自働車は各國ともに使つて居りますが其中、

佛　八萬臺

伊　二萬臺

獨　十萬臺

自働車といへば單に後方勤務のみならず、例の装甲して機關銃をのせ、丘であらうと谷であらうとかまひなしに敵陣に飛込んで行く、有名なタンクといふ奇怪な自働車もある。

戦線の長さは、日露役に於て二十里が最長でしたが、今回の各方面、西部東部、バルカン、伊太利、

全部戦線を合して見ますと、丁度、東京から名古屋下關、海峡を渡つて小倉、久留米、熊本までの鐵道を往復したものに等しい。かくの如き長い戦線に於て、一人の指揮官の下に一絲亂れず、整然として各隊の活動が行はれるのは、前申した飛行器自働車、二輪の自働車、有線無線電信、信號科の如きがよく進歩して居るからでありまして、一時盛に行はれました、傳書鳩に犬を使ふ事なども又行はれて居ります。六百里に亘る戦線一絲亂れずといふはかくの如き譯があるからであります。

次は費用　これも日露戦争とくらべて見ると驚くべきものであります。本年二月迄に於きまして、

英	六百億圓
佛	三百五十億圓
露	四百三十億圓
伊	一百十億圓
獨	五百十億圓
塊	三百四十億圓

日本はこの丸であります。（圖にて示す）英國が協商側で一番です。佛蘭西の三百五十億を日露戦争にくらべますと二十倍以上です。これがどの位に當るかと申しますに、

十圓金貨を並べて　約一萬七千里

即ち赤道をズーと廻つてまだ二千里餘る。

縱に並べると一千七百里

重さ

三萬噸

汽車に積むと五噸積三十輛つないだもの二百列車を要します。三萬噸ですからそれ位ひです。これが皆金貨で。一寸運べません。(笑聲)

それでかくの如き多額の費用を各國が費して居るのであります。吾國防費はご申しますと一年僅に二億圓、これで一國の平安が保證せられるかと思ひますと誠に安價な保險料である事が分ります。かくの如き多額の金は如何にして募るかといふに、一に内國債に依るのであります。即ち愛國心の結晶によらねばならぬのであります。之に學生達が大いに與つて力がある、例へば其零碎の貯金を出すとか、募集に當つては東奔西走するとか非常に効果があるさうであります。

戦爭の概況は之で終ります。

最後に此戦争に就て如何なるものを得たかといふ話をいたします。

抑々國がある以上戦争といふものは如何しても避くべからざる事であらうと考へます。従つて交戰國民の損害といふものは非常に多大なものである。然し乍ら裏に巡つて考へて見ますと、之は又利益も中々多い。則ち國民を鍛練するといふ事になる。從來よく唱へられた、箇人主義とか、自由平等主義とか

非國家主義とか、こんなものは忽ち一掃される。どうしても國家主義で行かなくてはなりません。従つて軍備の擴張といふ事が必要になります、御覽なさい、米國の如き今や五十萬の陸軍を編制しつゝあるといふではありませんか。

申すまでもなく戦争は生きた経験である。日露戦争といふ試験に及第するといふと列強の軍人が續々と日本に研究にやつて来る。これに依つて見ても戦争の有形無形と多大の得る所あるを示して居ります。今一つは、國民をして勤儉の氣風を養成せしめる事である。健全なる男子は皆出征する。すると後にのこつた老弱婦女子の輩が、生活と戦争の費用を受けもつことになります。廢疾者と雖、いやしくも息のある者は皆何かの仕事をする。徒爲徒食する者がなくなる。こゝに於て勤儉の風が自然に起るのであります。吾國は比較的戦場に遠ざかつて居る故か、一部人士に大いに奢侈費澤の風が漲つて居る様であります。但之は大いに反省を要することゝ思ひます。

戦争は又國民教育に非常なる利益をもたらします。學生は戦死せる恩師の肖像を教室に掲げて其下にて勉學し、隙あれば鋤をとり鎌を握つて耕作に従ひ、武器の製造を手傳い、又必要以外のことは止める様になります、前申した様に非愛國主義などいふことは到底行はるべきでないといふ事が自覺される。戦争は殊にかくの如き無形上の事に於て痛切に感ずるのであります。

かの獨逸は義務年限が八年、更に補習教育三年間、これが今度の戦争に於て多大の効果を收めました

目下更に兵役に服するまで、即ち徵兵年限まで義務教育をやつた方が好いといふ議論が盛に行はれて居ります。戦争はかくの如く、有形上無形上、總ての點に於て、殊に無形、即ち精神上に於て多大の影響を及ぼすものであります。

近く露西亞は世界の大國であり、人も許し我も許した強國であり乍ら、一度革命起り赤旗翻つてからは、忽ち一國の中心を失つてかくの如き有様になつて居ります。吾人は之れに鑑みて、益々愛國心、共同心、犠牲的の精神を養はねばならぬ。

露西亞を踏みにじつて獨逸はどれだけ東洋に手をのばすかそれは不明ではありますが、吾日本の將來も益々多忙であるに相違ない。

えゝ言葉が早くなり、それと學校での話をしつけない結果お分り難くかつたかと思ひます。  
之で失禮いたします。(文責在記者 大鳥居)



論  
說

校友會々長 春 日 重 泰

大正六年十一月、陸軍特別大演習の江濃の野に舉行せらるゝや、吾が校は大本營行在所として指定せられ、畏くも 大元帥陛下御駐輦あらせらるゝこゝはなりぬ。本校職員生徒は、其の無上の光榮に感奮して、同心協力、日夜その準備にいそしみ、諸般の準備、衛生施設等萬遺漏なきを期したれば、陛下には深く御嘉賞あらせられ、御還幸の前夜、本校に金貳千圓御紋章付銀杯を下賜せられ、本校の歴史に一大光彩を添へさせ給へり。寔に天恩の優渥なる、感激措く能はざる所なり。本縣當局は、本校に下賜せられたる貳千圓、本縣に下賜せられたる參千圓を基礎とし、更に、縣下素封家の寄附金を加へて、拾餘萬圓を得、之を育英資金となし、本縣中等學校卒業生の優秀なる者に貸費

し、以て永く 天恩を記念することごせり。

若し夫れ御下賜の天盃に至りては、長へに本校に捧拜して近く諸子の耳目にあり。來りて本校に學ぶ者、日夜淬礪し、本校をして華實俱に全からしめ、以て皇恩に酬い奉らんことを期せざるべからず。

## 太 刀 山

四 甲 松 井 彌 七

○軍國新春の劈頭靖國神社境内にドンドンドンと音色も冴えて満都に響き渡れば、好角家身を切る筑波嵐の寒風を衝いて押寄す。而も。吁御大太刀山隱退して彼の四股の響は遂に聞くを得ざる也。

○焼け失せし鐵骨傘下、彼の舊約に傳はるサムソンの石膏に血を通はしたるが如き白哲の偉軀を起し。伊達の大髻に男子の意氣を見せ、イヨツと起てばワツと来る大景氣、彼も豪かりしかな。

○男子須らく業に於て競ふも、道に於て和するの襟懷なかるべからず。此襟懷ありてこそ其胸中に餘悠あるなれ。又綽々として迫らざるなれ。土俵上勝つも負くるも光風霽月空嘯きてカラ咳二三回、誰が角力取つたかと云ふ無我無想、一種掬すべきの襟度、彼も亦堂々たる哉。

○力で賣る角力あり、意氣で賣る角力あり、業で賣る角力あり、力でも業でも意氣でも賣らず肉体美で賣る角力あり。是も當世にして別に不思議でも何でもなし。彼は如何傲然として富貴權門に屈せず、昂々焉として天下の相撲取を以て一世を濶歩せる者、彼や眞に國技館裏赤裸々の雄なりき。

○仕切り、立合、勝負の三拍子に人格を加味せざれば眞の力士とは云ひ得ざるなり。二代谷風は是に庶幾し。御大亦この倫也。怜俐なるは狡智を役し、遲重なるは迂闊に流れ、目拭うて快賭するに足る者殆んど之無き也。

○役者なれば若き時は若さで賣り、老いては老功で賣り得るも力士はさる譯に行かざる也。御大の晩年朽木山、大錦に敗込みしを以て、直ちに其の力量を云爲するは烏誅の見なるを免れず。

○力や技や肉体美に集りたる人氣は永續せざるなり。之に反して人格に集りたる人氣は永續す。彼や肩書も無く位階もなくて、立派に日本一の人氣を得たる豪氣なるものならずや。

○名力士太刀山今や過去の人となる。洵に痛惜深恨に堪へざる也。

○しかれども今時學生娛樂界の荒廢何ぞそれ甚しきや。清新なる趣味の次第に荒み行きつゝある反面は如何。サスラヒの歌とか大正節などの高唱され而も衆皆耳を傾け、一人の起つて是を制する者無き何たる腑甲斐なき事ぞ。

○學生には學生らしき娛樂なかるべからず。園暮か活動寫眞か尺八か玉突かハーモニカか否々然らず。

○氣節を尊び、廉耻を重んずるの風は高尚なる趣味より来る。校友會員諸君十上の如き柔弱なる技を廢し、音調野卑なる歌謡を杜絶し、血湧き肉踊る勇快無雙の角力に趣味を求めては如何。

○角力の争や君子也。軍扇一閃また隔意なき也。陰險の手段惡辣なる復讐を企つる者、これ多くは社會士俵上の黒星男なり。此輩や。磊々落々たる角力に趣味を有せざるに因らずんばあらず。

○寄語す、勇心勃々たる彦中生徒諸君痛快なる角力趣味を解し而して最も適切なる眞理教訓を其中にさぐるは是吾人の重大にして且當面の急務なるを、又力士太刀山の一代は現代の大なる清涼劑なるを。

### 清盛ごクロムウエル

第四學年甲組 久 田 郁 三

實に面白きは源平の爭黨なり。或は保元或は平治白勝ち赤勝ち轉々乎として走馬燈の如く盡くる所なく極る所なし。讀む者をして變遷の急なるに驚かしむ。就中最も豪壯を極むるは清盛なるべし。

天を恐れず上を恐れず人を恐れず行ふ所忌憚なく己の欲する儘に行へり。

我輩史を読み清盛に至り未だ嘗て快哉を叫ばんばあらず。

「伊勢の平氏はすがめなり」これ公郷の忠盛を評せし語也、其の子の清盛の宮中に於ける地位又知るべきのみ。然るに事實は全く是と相反せり。

保元平治の二役は清盛をして登龍門のかぎを握らしめたり。清盛や元一野武士の子當時にありては少くともぞかく思はれ居たり。今や太政大臣の榮官に登る隔世の感なき能はず。

口惡がなき京童の評や如何なりけむ。

三百の禿童は洛外に充ち彼を非議するものは用捨なく逮捕してこれを嚴罰に處せり。惡辣のそしりを免れずと雖も又痛快奇抜の男子たるを失はず。

英蘭の紛亂に紛亂を重ね革命相繼ぎしき慨然たちて中古の人心を震駭せしものこれを誰とか爲す。オリバークロムウエル是なり。

彼もど名家の出推されて代議士となり無爲にして終る。平和の時に於ける彼は凡人なりき。

一度チャーレス一世の惡政を脱せんとして革命の師起るや國民軍を率ゐて勤王軍と戰ひ惡戰苦鬪一よく十に當り鐵旗騎隊の名を得たり。ネーブルの一戦は彼をして大英共和國の盟主たるべき萌芽を生ぜしめたり。彼や心事高潔にして謹嚴一度心に通ひしことは遂げんば止まざるの性質を有す。

其の性質行動清盛に髣髴たるものあり。

清盛は目的の爲には友を殺し叔父を殺すことをも敢てする人なり。クロムウエルとても政策の爲めにはクーデターを行ひ議員を投獄放逐し議會を解散し全然自己の掌中の物たらしめたり。清盛の鳥羽上皇を幽閉し奉りしはオリバークロムウエルのチャーレス一世を弑せしとその立場相酷似す。もとより後者

は彼我國情を異にし大勢の然らしむる所輿論の然らしむる所又止むを得ざることといふべきか然れども暴戾の罪は如何にしても辯する辭なかるべし。

前者にありては唯惡虐無道の四語に盡く。而も兩人とも平然として顧みる所なかりき。面の皮の厚きも此處に至れば極れり。

清盛が禿童を放ちしが如くクロムウエルも又己を非難攻撃するものを檢舉せしめたり。

蠻勇の點より言へば清盛遙にクロムウエルに勝り眞面目の點より言へば清盛又及ばず。

クロムウエルは「共和の保護者」なる尊號を受けし後も尙勵精治を計り内治に外交に頗る見るべきものありき。

此點は清盛の太政大臣に昇りて後榮華を極め復政を見ざりしと雲泥の相違なり。

驕る平氏は久しうからず一世の梶雄の死後は見るも哀れの慘状を呈しぬ。クロムウエルも其の死後は幾もなく天下分裂し畢生の事業は忽ち崩れぬ。

英雄の末路共に哀の感を深うせしむ。

しかれども最期は清盛遙に猛烈也。

病中の清盛は實に非慘なりき。身の堪へ難き苦しみに悶へうめく時敗報連りに來り風流男の色を失ひ右往左往狼狽措く能はざるを見て自由ならざる身をかこち切齒扼腕すれども甲斐ぞなき。かゝる境遇に

ありても尙初志をひるがへざざりき。

枕邊に侍する一族郎黨に曰く「我がなき後は堂塔を立つるに及ばず。佛事供養をも爲すべからず只今生の名残に兵衛佐奴の首を見ざること遺憾なれ。速に討手を出して渠が首を刎ね我が墓前に手供けよ。これをこそ眞の孝養といふべけれ」と其の壯烈眞に鬼神を欺く。

是を東西に尋ねて例なく古今に求めて非なし。彼のクロムウエルの人心の離叛を憂ひ大亂の兆を見て憂愁措く能はず身の不遇を嘆じて悶々の中に病を得て遂に死せしにひせば飽くまで東洋式也。

是を要するにクロムウエルは西洋式英雄にして神經質也。清盛は東洋式英雄にして血液の循還遲鈍也。前者を短銃とせば後者は巨砲なるべし。

短銃は以て人命を奪ふべく巨砲は以て城砦を抜くべし。

## 余が雑感

四乙木下八郎右衛門

豕が感する處、他にありなんとすれども、當時には頭に浮び遊ばず。若し何時か浮び出づるも知れず時あり機あらば又書くことも得べし。

文は雑書を續みて得る處少しあせず、之誰も同感なる處なるべし。之所謂「猿の人真似」に類せざるか。

世に先生と言はれ、偉きものにせらるゝ程損なることなし。何故なれば、過あらば之を辯せんとするが如ぎ卑劣なる心さへ、起り易きものなればなり。

平凡なる語は何の時代にも、歎美すべからざる語なり。何れの時代にも英雄は事業の中心たり。英雄の時代去れりと言ふこと勿れ。是れ衰世の聲なり。

余は富の至福を欲するものにあらず。何んとなれば、富は一個人に對しても一國に對しても其半面には必ず禍あり。例せは、富人必ず金庫を思ひて、夜も安く寝ず、之其の第一ならずや。富んで墮落せざる人少く、富んで敗せざる國民も亦少し。

老人が強ひて若き者に伍せんとするは誠に見苦しき事なり。耻を取る途なり。世には牛は牛連れ、馬は馬連れこそ處世の道なれ。とか云はずや。

幽靈の正体見たり枯尾花とは接物處世の秘訣とすべき一句なり。極めて平凡なる事を誇大に飾るとも平凡なる事は依然として平凡の事たるのみ。

所謂時勢に合はぬ人と云ふは其幾部分は流行の風に搖がざる堅志の士なり。

天下は常に新しき事項を生むものにして、新を競はんとするは淺薄なる人生觀ならずや。

箱中に鼠あり。放つて之に車を轉せしめんとするに鼠は人の指揮を待たずして之を轉す。人生斯くの如くあらずんばあるべからず。彼機を見るの如何に早きか。

富者は尊ぶに足らず。何んとなれば彼若し其の富を公共に利用する能はずんば、是れ吾人の養を探りて己が養とするのみなればなり。

吾人は何時も英雄を崇拜するの心を有するものなり。眞個の英雄に逢へば嫉妬競争の邪念は頓に煙消霧散して其の足下に跪かざるを得ず。

## 吳越之興亡に付きての所感

三甲 大谷仲次郎

古今を通じ東西を論せず優勝者たらんと欲せし者は萬難を斥けて成功の途に達せんとせり、彼の賴朝を見よ、家康を見よ、家康の如きに至りては「三杯目にはツツと出し」の食客幕に十八年の間が千辛萬苦の結果遂に二百餘年間の基を開きしにあらずや。

今之を吳越の興亡に見るに彼の吳王夫差越の爲に其の父の殺さるゝや次後復讐の念忍び難く薪中に臥しては身を苦しめ心を勞し、萬苦の後遂に越を破りて勾踐を降す惜いかな侯臣太宰伯嚭の爲に越の謀中に陥る越王勾踐餘兵と共に會稽に棲み吳臣太宰嚭に對する賂効表はれて吳臣となるを許され膽を嘗むるの苦を積み會稽山の恥を忘れざらんとす。

大夫種四政を詫し軀は范蠡と共に治兵に心し吳を謀るを事とす遂に越吳を亡ばすここに吳より夫差の

臣事せんことを請ひしも范蠡之を許さず夫差の憤怨極に達するもこれはた何の効かあらん。

前に夫差の越を服せしや良相子胥なるものあり若し差にして彼の言に従はんか越を亡ぼして長く中原に覇たらんこと必然なりしなり。

然れども夫差彼が言を用ふるの氣力なく遂に太宰嚭の譖を用ひ子胥に劍を賜ふ從りて以て吳勢大衰し玄かく滅亡の因をなす嗚呼惜しむべきかな。

思ひてこゝに到れば勝者たらんとするものは賢相の助くる有るを要す勾踐の吳を敗りしは蓋し賢相の助ありし爲なり范蠡大夫種の去るに及びては近く滅亡するところとなる。

家康の握覇三百余年の基を開きしも又其の臣の賢なりしもの多きが爲なりしなり。賴朝の滅亡早かりしは賢相多く去りしが爲なりしならん斯く云へば人に頼るの甚だしきを云ふものあらんも若し斯くの如くなかりせば將に成るを得とも將に將たること能はざるべし將に將たるの槩ありてこそ眞の人傑とは云ふなれ。

然れども夫差又人傑たるの價値あり萬難を斥し千辛を嘗めし後一旦たりとも越を敗りて其の王を恥しめ以て亡父の仇を酬ゆ豈に毅然たる丈夫にあらずや。

## 新 春 雜 感

ニ 甲 岩 根 恒 吉

四山の雪玲瓏として、冬深しと雖、しかも只新春なるが故に氣新に心澄み渡りて一脈の春風早くも訪れる心地す。これを冬といふも可なり、されど吾人の心意は之を春として迎へ喜ぶに於て決して妨げざるなり。

新春の新しさも、歳暮の寂しさもたゞこれ相隣れるタイムの脊中合せをなせるに過ぎず。彼を樂となし之を寂しこなすも、もど之人間心意の情感のみ。たゞしかく感じ、しかく思ふのみ。日本の國運の天壤と共に無窮なること吾人の五神の依然として改まらざる事、數へ来れば數知れず。然らば改まると言ふは不目出度が至當か?。

然し油斷すれば無意義に冥途の旅の一里塚越すが如し。敢て一休を待ちて知るべきにあらず。

吾人は現代の生活不満をいだき、無意義に冥途に旅せんとするものに非す。感謝に讃美とを捧ぐるに躊躇せざるなり。

思ひまはせば吾人の先祖の一部が平安中朝に於ける藤原道長の攝關時代に於ける宗教、藝術、學問、工業、其他の新興文學に於て綜合せられたる豊富にして華麗に生活を經驗せし事は久しく後の子孫の美む所たりしが、今にして思ひいたれば、當時の豊富も淺薄の感を免れず。當時の華麗も甚だしく色彩に

乏しきものなり。

茲に十七春秋を迎ふ、二昔に足らぬ三年、敢て短しといふべからず。  
既往を追憶し、將來を思ひ、新春に當り稿を草す。



## 文苑及韻藻

### 孤島の夢

五乙田中與惣彌

春風薰りて地中海上島影浮び青藍静かに流れて月光の汎ゆる時東歐亂れて淡き光は物凄き風浪の孤島に落ちぬ五十萬の大軍が國境を越へしは春風そよくと軽く顔を拂ひ正旗駘蕩の波に翻りて花やかな騎兵の蹄ひとり高く美しき百花の野邊に逍遙ふ春夢かとあやしまれぬ。

醒むれば流石に老い行く年のながれ早く春暮れてスラーヴ民族破約の敵を蹂躪せんと意氣衝天の勢にてモスクーへへへ佛蘭西軍は前進せり。野越へ山越へ川を渡り岡を踏んで露境近く長驅せしは既に夏のもなかも過ぎて露西亞大曠原目前に展開せられ珍らしき東洋風の建築の散在せるなどはや敵地に入りし心地して血湧き肉躍りぬ。

打ち向ふまゝに秋野荒れて北米の風寒く交戦絶えて兵器するごし。

スマレンスク、ボロダノの激戦に容易く露軍敗れて斥けり、向ふ所敵なしとナボレオンの精銳は追撃の命に見る／＼高鳴る海嘯のごとく押しよせたり。星斗燐爛として涼しき銀河の流るゝ九月十四日先登部隊はとある村落に野營せしに「はるかにモスクー市が見へる」など叫ぶ聲にナホレオン狂喜し輕く沈

思の色にて眺めぬ。二百餘の寺院一千の大廈高樓光の海に浮びて白銀の光を放ち尖塔圓閣宮殿天を衝いて聳えぬ。

「おう華麗のモスコ一市よ、月下に眠る舊都よ、  
今まさに我手に落ち入らんとす。」

と雀躍し夜もすがらうち眺め樂しみし最後の憧憬とは誰が夢に通ひし、ムラーの率ゐる騎兵隊は勇みて都門に入れり、されど街路寂寥として聲なく全市三十萬の民去つて影を止めず重き馬蹄のみ響けり。

全軍事の意外に驚きぬ夜に入りてナポレオン本陣をクレムリン宮殿に置き市内の各所に兵を據らしむ

秘密の目的の潜めるが如き不安の街はあくまで靜にして豫期せる佛軍の満足は恐ろしき醒覺の胸を痛め

たり疑問は疑問の心を疑ひ恐怖の色は胸中によひて衝天の勢は齟齬せり。

されどナポレオンは壯麗の光に迷ひ彩色の美に醉ひ運の極みをも知らずしてクレムリン宮殿に配下を集め十六夜の月下に祝宴を催しぬ。満開せる花卉は馥郁たる矛かさ芳香を放ち盡趣津々たる東洋風の花園には艶けきエメラルドの異彩を放てり目も絞に光り亂るゝ萬花の反影は媚かなる風姿と共に婆娑たる庭園の美觀を呈しぬ今やたけなばにして樂曲起らんとするとき——火事よ——と叫ぶ鬨聲は清澄の空に鮮に聞へ静かな街は再び叫聲湧きぬ。

見るゝ中に火海と化し火焰の柱は高く空中に聳え、物凄き黒煙は狂瀾し狂奔せる怒濤は旋回せる颶風に助長せられて天を焦し地を焼く飛火渦波喧騒の叫び崩るゝ物音はぢくる響名狀しがたき悲哀と恐怖の光景なりき。遂にクレムリン宮殿火風に誘はれ青き焰をあげぬ歡樂のあと空しく化して迷零恨の焰を

はきたり。ナポレオン市街に出でゝペテロフスキュー宮殿に止まりぬ。

延焼四晝夜一萬二千戸を焼き盡して火始めて消へたり。露軍の計畫は見事に完成せり大陸封鎖令に叛きチルシット密約を破らんと竟に意を決して舊都に放火せしがことし。

懸軍萬里の遠征功なくナポレオンの運命は危急に落ちたり露帝アレキサンデル一世和議なく自らも和議を申し込みて徒らに日をすごせり時は寒氣すでに熟してアルゝ山上白雪皚々として睥睨の目をそばたて吹きさぶ枯風曠野に颶々の聲をたてゝ佛軍を戒しめたり。ナポレオン意なきを知り全軍の覆没を怖れ十月十九日遂に退軍せり從兵僅か十二萬。

コサツク騎兵の追撃にあひ困難に落ち入りしも更に悲しさは十一月七日未曾有の大吹雪に殪るゝあり餓死するあり戰死するありあひつぎゝて屍の山は築かれぬ。

道路の方向地勢の險易さらに知るよしなき上に激しき追撃に堪へられず遂に殘兵二萬を棄てゝ巴里に急行せり以外の敗亡は遂に運命を一轉せり謫居六年孤島の夢やいかに。

## 夜の道

四丙 長見貫石

鳥が三羽向ふの雲間を縫ふて過ぎたと思ふとバツと街燈が頭の上に點じ、今迄無心に川の流れを視つめて居た僕はハツと我にかへると急に夜の幕はせまつて僕の身邊を包むで終ふ様な氣がした。長久寺山には電燈が二三點せられて居るらしい、はつきりとは解らん。